

二〇一〇年のノーベル化学賞の受賞が決まった鈴木章・北海道大学名誉教授(80)は太平洋に面したむかわ町生まれ。北国の秋の味覚、シシヤモ漁が始まったばかりの町に「ノーベル化学賞」のビッグニュースが飛び込んだのは十月六日午後六時五十分だった。町の商店街の一角でシシヤモや特製のしょう油、味噌などを扱う食料品店「スズキ」を営んでいる鈴木さんの実弟、譲さん(76)に通信社から電話。「えッ、確かですか」。受話器を思わず握り締める譲さんの声に合わせるように、店先で受賞決定に備えていた多くの新聞記者の携帯電話も一斉に鳴り始めたという。

テレビニュースが流れると、近所の人々が「おめでとう」「とうとう、やりましたね」と笑顔で駆けつけた。山口憲造町長の指示で町役場は午後八時過ぎ、防災無線線を使って「むかわ町出身の鈴木章・北海道大学名誉教授にノーベル賞が授与されることが決まりました」と速報した。生家の電話は未明まで鳴り続けた。人口九千人のマチは「ノーベル賞学者を生んだ町」として注目される。母校の北海道大学の学生や苫小牧東高の生徒たちは「大きな勇気をもらった」と話す。北海道で初めてのノーベル賞学者の誕生は今後、いろいろなシーンで地域に元気をもたらすきっかけになるのかも知れない。

鈴木さんは一九三〇(昭和五)年九月、旧鶴川町(現・むかわ町)生まれ。父の定軸さんは多くの職人を抱えて理髪店を営んだ。時々琵琶(びわ)を奏でる粋人だった

## ノーベル賞と「シシヤモの町」

という。定軸さんが一九四六(昭和二十一)年に五十一歳で死去してから、母ナエさん(九九年、九五歳で死去)は衣類の行商で農家を回り、六人の子どもたちを育てた。ノーベル賞の鈴木さんは六人姉弟の二番目で長男。むかわ町で暮らす譲さんが次男。三男の健さん(73)は秋田大学鉱山学部から日本軽金属の関連企業に進み、今は苫小牧市に住む。

「勉学への人知れぬ努力」「母子家庭の長男」などとメディアが伝える子ども時代の話題を鈴木氏は必ずしも好まないようだったが、同級生らは「章さんはいつも本を読んでいた」と振り返る。鶴川から旧制苫小牧中学(現・苫小牧東高)へ汽車通学した鈴木さんは自宅から鶴川駅へと向かう約一キロの道々で本を広げ、列車の中でも本を手離さない。薪を背負って本を読んだという江戸時代の農学者と鈴木さんの姿を重ねて、級友たちは「二宮金次郎」のニックネームを付けた。恩師の勧めで北海道大学理学部に進んだ鈴木さんは合格と同時に一年間、休学して代用教員を務めて学資を蓄えたりした。

そんなエピソードを知ってか、知らずか、鈴木さんのノーベル化学賞の受賞が決まった翌日から、むかわ町を訪ねる人が急が増えた。役場には「鈴木博士の生家はどこですか」などと問い合わせが相次ぐ。札幌からマイカーでやってくる人。「飛行機の待ち時間があつたから」と新千歳空港からレンタカーで駆けつける家族連れ、貸し切りバスで立ち寄る団体客。そんな人々が

「スズキ」商店でシシヤモを買い求める。シシヤモの冷凍宅配便の注文も全国から殺到した。テレビの朝のワイドショーで受賞を伝えた司会者が、焼き立てのシシヤモをスタジオで食べて「うまい」と叫んだ効果もあつたようだ。

むかわ町と言えば、二〇一〇年のバンクーバー冬季五輪・女子スピードスケートの団体追抜き競技で銀メダルを獲得する原動力になつた田畑真紀選手の出身地。阪神・甲子園球場の選抜高校野球大会で活躍した鶴川高校の試合を記憶に刻んでいる人も少なくないだろう。市町村合併で一緒になつた穂別地区(旧穂別町)では高齢者が手がける自主映画グループ「田んぼdeミュージカル委員会」の活動も広く知られる。今は四作目を撮影中。町民たちはそれらの活動をいつも支えてきた。メディアが注目するいろんな場面で取材に慣れている町長が今度ばかりはちよっぴり考え込んだらしい。「ノーベル賞だよ。期待はしていましたよ。でも、急には実感がわかない。むかわ町がどのように対応したらいいのか」。

北海道出身者初のノーベル賞。北大の卒業生にとつても痛快なニュースだろう。そのサプライズが、北海道の若者たちにとってどのように伝わるのだろうか。化学関係の人材育成を目指す新しい教育システムの可能性にも期待したい。どこかの知事が言うように「道民栄誉賞」を差し上げる程度で済むか? ノーベル賞の授賞式は十二月十日、スウェーデン・ストックホルムで行われる。(圭)